一般研究発表

六才の稽古
ー「玉兎」を事例としてー

厚母宗子
西原　和（花柳　和）

1．研究目的

日本舞踊が、どの様に、低年齢のこどもに習得されるか、に視点を置いて、事例の分析を行い、社会・教育の混迷する現況に、日本人の根っこ〔文化・伝統〕を再認識し、一般教育現場を含め、広く舞踊教育のあり方を模索しようと、考察を試みた。

2．研究方法

(1)　対　象：六才男児１名（入門後、5箇月）
（特別な日本舞踊の家系でない）
指導者：花柳流師範（指導歴25年）
舞踊研究所を主宰、門下生は３才～高齢者。幼稚園（1)、大学（2)、専門学校（1）でも、保育・講義の一環として日本舞踊の指導を行っている。

(2)　演　目：清元「玉兎」

(3)　稽古期間：自1996年12月４日
至1997年11月24日
（御浚い会）
稽古回数：49回

(4)　分析資料
①毎回の稽古後の自由筆記（文と絵）による記述。〔六才児の記録〕……(24回分)
②御浚い会の観賞者の感想文……(11名分)
③御浚い会の記録 VTR 映像・写真
(1997年11月24日)
④指導者による、稽古進行の段階別記録 VTR 映像　(1998年９月23日)
・資料①・②・④について、記述内容を松本千代栄の「舞踊表現の構造と要素」で分析。
・資料③・④について、時間系列による映像分析を行った。

3．結果と考察

①六才児の記録

記録は本人の自発的意思にまかせ、稽古回数49回のうち24回分である。最初は記録をとる意思にバラツキが見られるが、中頃からほぼ継続的にとっている。記述は、身体の動きに関してが多い。絵については、26回まで最初のポーズがほとんどである。初めて稽古した基本「逃げ腰」はすぐに絵にも表現された。同じポーズでも回数を重ねていくうちに人物の大きさがだんだん大きくなり、表情も笑顔が強調されている。29回目からラジカセの絵が続き、31回目のラジカセから音が流れ出ているように書かれていて、それまでの身体意識の記述から、「何をどこを見るか」の意識の記述に変容している。また、稽古作法として順番を待って見ている人はラジカセを操作する（どんな小さい子でも）ことになっている。自立を促す稽古スタイル（他の例：先輩が後輩の着物の着付・たたみ方など教える）親は一切かかわって欲しくないという方針である。その意図は、稽古作法は伝達していく（先輩から後輩へ）もので、稽古としての自立が大切であり、個人の自立に繋いでこそ、稽古場での連帯感＝和が生まれる、という考えからである。御浚い会前二週間から全く記録がないのは、通し稽古に入り、作品に馴染んで踊り通すことに意識が集中していた為と思われる。最後の記録は会で頭につける小道具「うさぎの耳」を大きく描き、会へ向けての意欲を示している。

②友人（同年令児とその親）・知人の感想

共通した感想は、長い持ち時間を一人で踊れたことに対する驚き、素直で伸び伸びした大きい動きが良かったこと、衣裳がとてもかわいかったこと。日本の伝統文化に小さい頃から接する大事さにも触れ、子供の成長に熱い思いで励まそうとする（例：目頭が熱くなった。）心を導く。

③御浚い会

指導者が指導した基本は、振り・踊りとして六才児の身体に取り込まれたと言える。常に客席の方を向き、終わりまで立ち止まって考えるということがなかった。（参照：図－基本）

④指導者の指導法の特徴

各段階の稽古は、歌いながら進められるが、歌詞のみでなく、口三味線、「フッ、ヤッ、ハッ」などのかけ声、基本の名称（束割り、逃げ腰…）、コツが複合的に入り混ざって伝授され、振り・踊りの時間的流れは、決して壊さず、タイミングや間を重視したリズムのある指導である。

まとめ

一対一の対面で教えてもらい、横並びで真似て、離され一人になって自立し自らに責任をもって踊る。指導者との関わり〔向、傍、離〕で一回ずつ積み上げていく稽古は、舞踊の楽しさだけでなく生き方、関わり方の基本を学ぶ。自己責任で一つの演目を全うする御浚い会が、その演目の稽古の締めくくりである。幕が下りる、その瞬間の六才児の顔の表情に全てが語られている。汗と脈打つ鼓動と満面の輝きに成長の節を感じることができる。郡司正勝先生が『おどりの美学』で「舞踊の生命は…その連続に生命感を持たせることである。生命感とは、リズム感に他ならない。」(P18) と語られている。リズム感・生命感を内蔵するおどりの真髄に触れる指導によってこそ、手解きを順次進めていく次への動機付けになる。

指導者と子供が一対一、且つ時間をたっぷり積み重ねる稽古の意義を再確認し更へと繋ぎたい。